

日本教育岩手

〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

代表 八重樫 勝



「ピンチはチャンス」

岩手県小学校長会

会長 太田 勝 浩

(盛岡市立中野小学校校長)

「ピンチはチャンス」という言葉をよく耳にします。逆境のような状況を乗り越えることで、より自分を成長させるという意味だと思いますが、まさに今年度はその「ピンチ」の年になってしまいました。新型コロナウイルスが全世界で猛威を振るい、日本でも十月末現在で感染者数が十万人を超し、死亡者数も千七百人を超えています。岩手県でも七月末まで感染者ゼロでしたが十月末現在二十七人の感染者が確認されています。

県内の学校では、三月に一斉臨時休校を行い、今年度も四月二日から一週間程度の臨時休校を行いました。日々の感染予防対策として、各家庭での検温をはじめ、マスクの着用、「密接」「密閉」「密集」の3密を避ける新しい学校の生活様式が定着しつつあります。

この「ピンチ」の状況下を自分たちが成長できる絶好の「チャン

ス」ととらえ、中野小学校で発足した学習会があります。「かりんの家」と命名されたこの学習会は、休業期間中のわずかな時間を利用して開催されました。講師は、学校の先生方です。小学校の教師は全教科を教えなければなりません。しかし、優れた専門性を持つ教職員がたくさんいるのです。そのエキスパートの講師からエキス部分分を学びます。図工、音楽、体育、社会（地図帳）、書写（習字）など様々な教科で開催されました。もともと若い頃に学んでおけばよかったと思うことがたくさんあります。特に、若い先生方に好評で週休日に開催された時は、他校の先生方も参加していました。

今年はこのようなコロナ禍の状況下で新学習指導要領が完全実施となりました。新しい時代に必要となる資質・能力を育むために、各学校におけるカリキュラムマネジ

メントを確立し、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を進め、「社会に開かれた教育課程」を実現させなければなりません。

また、今年度から、プログラミング教育も実施され、リモート授業などを想定したGIGAスクール構想の推進とともに、ICT等の教育環境が急速に整備されつつあります。しかし、いかにICT化が進んでも、幾多の困難を乗り越えながら逞しく生きていく子どもたちを育てていくのは私たち教師（人間）です。集団の中で生じた課題の解決の仕方、人と人との適切な関わり方、相手を思いやる心など、人との関わりの中で身に付けることができない大切なスキルがあるはずで

す。東日本大震災から九年が過ぎ、いじめ、不登校問題等山積する課題がありますが、次の時代を担う子どもたちの輝かしい未来のために、校長としての「自覚と責任」を持ち、校長会が一枚岩となって、英知を結集し、教育に当たりたいと思っております。ピンチをチャンスにかえて。

いわての学校～その5



生徒の「自走力」向上に主眼を置いた「大船渡学」における取組

岩手県立大船渡高等学校 校長 吉田 祥

県立大船渡高等学校の教育実践が「大船渡学」として、マスコミ等でも注目を集めています。その実践の概要を同校校長吉田祥先生にまとめていただきましたので紹介します。

はじめに

「大船渡学」が産声を上げて5年目を迎えた。この間、毎年改良を加え、より良い形を求め深化に努めてきた。当初、地域課題探求の色合いが濃かったが、現在では、生徒自らが主体的に、自分の将来像を導き創造するために、必要な知識や行動・考え方を引き出す探求の場として、大きな役割を果たすまでに至っている。

一般に、「総合的な探求の時間」は各学年1単位(計3単位)で展開されるが、本校では、昨年度より1・2学年各2単位、3学年1単位

(計5単位)で展開している。1・2学年の2単位中1単位分は、夏季・冬季休業中の課外を廃止し、5日間の特別授業(「夏の陣」、「冬の陣」)に置き換えて充当している。本寄稿では、今年度1・2学年の取組の概要についてご紹介したい。

1 具体的実践内容(予定含む)

(1) 通常授業における実践

① 1学年

到達点を「自分の学びたいことが明確化され、その学びたいことと、他者の視点、高校の各教科の学びをつなぎあわせ、未知に対して対峙できること」と設定した。

前期は、オリエンテーションの「大船渡学とは?高校での学びとは?」を皮切りに、「アフターコロナ」の社会を表現する「IⅡ」、「自分の興味関心」と社会・地域をつなぐ」等のテーマに関するペア・グループワークを重ね、夏休みのアクション(アフターコロナ

につながる取組の実践)に向けた準備(チーム作り・計画書・ブラッシュアップ)を経て、「夏の陣」本番を迎える形とした。

後期は、「夏の陣」の振り返りと次のアクションへの芽出し、自分の興味・関心を学問と結びつけることを起点として、「自分の専門性を活かして誰かを幸せにすることを考える」、「自分の実践と学問をつなげてみよう」、「課題設定とは」



夏休みのアクションに向けた準備

等のテーマについて、ワークを展開し、夏休み同様に冬休みのアクション(自分の興味関心を地域や社会にひろげ、誰かを幸せにくる取組)に向けて準備して「冬の陣」に臨む予定である。最終的には、「冬の陣」の成果を全生徒が共有する目的で、「大船渡学」発表会及び振り返りを行い、2学年の取組に繋いでいくことを想定している。

② 2学年

到達点を「探究が継続的に進んでおり、その中で、特に深めたいものが具体化され、地域・社会での原体験や高校での教科学習との繋がりがから意味づけされている」とことと設定した。

前期は、「高校に通う意味、高校と大学の学びのちがいは?」から始めて、「アフターコロナ」の社会を表現する「IⅡ」、「自分が研究したいこととは」、「自分が研究したいことの既知と未知の境界を考えるIⅡ」、「既知と未知の言語化・共有と深化」等のテーマに係るワークを経て、「夏の陣」(自分の探究を深めることに対して専門的に応援してくれる人に会って自分の探究テーマにおける「重要な未知」を見つけてくる取組)に向

けて準備し臨んだ。

後期は、「夏の陣」の振り返りと自分の探究テーマにおける「重要な未知」を起点として、「未知への対峙」の方法について考え、「異なる分野の知識を組み合わせ新しい価値を創造するIⅡ」、「私の探究テーマと修学旅行IⅡ（仮説の設定と検証）」、「私の探究テーマの未知とは」、「未知への対峙の方法とは」等のテーマに沿って、ワークを重ねて1学年同様に「冬の陣」（自分の探究テーマの未知に対して、自分らしいアプローチを試みる取組）に向かう予定である。「冬の陣」の集大成として、成果を全生徒で共有するため、振り返るとともに自分の探究テーマに関する論文作成までを目指している。

(2) 「夏の陣」における実践

大テーマを「2030年の高校での授業をやってみる」と設定して、7月20日から28日までの連休を挟む5日間実践した。スケジュールは次のとおり。1日目は教員による「本当はこんな授業やってみたかった」授業見学、2・3日目は2030年の高校授業づくり、4日目（一般公開）は授業（20分）・振り返り（5分）6セット、5日

目は授業3回転・振り返り。

実践に当たっては、次の2点「新型コロナウイルスの影響やITの活用、そして学習指導要領改正など、多面的な変化のあと、高校はどんな学びを行う場所になるのか、実際にチームで授業を行う」「テーマは自由であるが、2030年時点の最新であるうと考えられる授業とし、受講者に理解と納得感を得られるものとする」に留意した。また、授業を行う前提として、「とにかく、深く、マニアックに2030年で授業をしていることを忘れない」「2030年の大船渡高校が、毎日通学するものであるかどうかは不明である」ことを確認した。



2030年の高校授業づくりの様子

実際には、生徒は80チームに分かれ探究テーマを設定し、ありと

あらゆる分野に関するユーモアあふれる授業を自由に展開した。「音楽がスポーツに与える効果（スマホの記憶力ゲーム活用）」、「もし春秋戦国時代にコロナが流行（はや）ったら：（キングダムを引き合いに）」、「22世紀にはドラえもんの世界は実現しているのだろうか？（どこでもドアの活用）」等を授業テーマに取り上げ、大人が到底思いつかないような発想が随所に見られ、非常に印象深い取組となった。また、一般公開には、県内他校から生徒46名・教員29名が見学に訪れ、授業にも参加していただき、生徒同士が探求のあり方を互いに理解しあい、交流を深められたことは、今後の大船渡学にとって、とても貴重で大きな刺激を得る機会となった。

2 実践のまとめ

1・2学年ともに、それぞれの到達点に向け、ペア・グループワークを通して準備して、「夏の陣」においては、学年・グループごとに進捗状況に違いが見られたものの、目指した目標に着実に近づいた気がする。1学年では、大船渡学の概要と探求の仕方について学び、

それを今後の高校生活にどう生かしていくかを把握する契機となった。また、2学年では、昨年培った大船渡学の経験を生かしながら、自己の探求テーマに迫り、進路選択に対するモチベーションの向上に繋げることが出来た。初の試みであったが、前述の他校生をも交えてアクシオンを起こす取組は、今後も、ぜひ継続していきたいものである。

3 今後の課題

通常授業での取組に加え、長期休業中に「夏の陣」「冬の陣」を実施する形に変えて2年目となり、生徒・教員ともに要領を掴み、この体制が軌道に乗りつつある。

「大船渡学」開始以来、「全教職員共通理解の下で、運営がなされているか」、「全生徒に大船渡学の意義が浸透し切れているか」、「全生徒が真に意欲を持って取り組んでいるか」等が究極の課題として存在しているが、その克服に向けて困難は伴うものの、工夫改善する歩みを決して止めることなく、今後も、生徒の「自走力」を高め、「教員は伴走者であり続けること」を肝に銘じて前進し続けたい。

新型コロナウイルス対応にみる学校・園の危機管理(最終回)
「新しい生活様式」の確立に努める
 県立学校・特別支援学校の取り組み

7月29日、全国唯一新型コロナウイルスウィルス感染者ゼロの岩手県で感染者が確認された。9月16日には新型コロナウイルス感染防止対策を主要政策に掲げて新内閣が発足した。しかし、依然第二波かと危ぶまれるかのように感染の増加が続いている。

支部事務局で今年度企画した各校種・園のコロナ対応の特集は高等学校・特別支援学校の取材で最終回を迎える。9月17日盛岡第一高等学校、9月25日盛岡視覚支援学校を訪問し、佐藤 有校長(岩手県高等学校長協会会長)、清水利幸校長(同特別支援学校部会長、岩手県特別支援学校連絡協議会長)のお二人にその取り組み状況等を伺った。

盛岡第一高等学校の取り組み

【三・四月の一斉臨時休業

〜教育活動に大きな影響〜
 学校にとつての三月、四月は、実質の授業日数こそ少ないが、年



取材に応える佐藤校長

度の締めのみであり、新しい年度の幕開けの月ということで極めて密度の濃い毎日が続く。

三月、四月の「一斉臨時休業等の措置」の期間中、実質の授業日が五日間であったため授業の遅れは最小限で済んだ。この期間は課題等に対応したが、学校行事や部活動が制限されるなど様々な教育活動に大きな影響を及ぼした。

卒業式は、直前に県外で受験し戻ってきた生徒も多く感染拡大を心配したが、在校生の出席はなしとし、卒業証書は個人受領から代表受領に変更するなど感染リスクを最小限にして実施した。高校入試は換気や消毒など感染症対策を

講じながら気を引き締めて対応した。合格発表日は掲示板を二か所に設置するなど「3密」を回避する対応をとった。在校生による恒例の部勧誘はなしとし静かな発表風景となった。卒業式は放送による講話とし離任者のメッセージを配付して対応した。

春季休業中は校務運営委員会で校内の感染症対応マニュアルを確認し、新年度からの学校再開に向けた準備をした。この期間中の生徒・保護者への連絡は一斉メールと学校サポートサイト(Web)を利用して行った。部活動は、例年県外遠征する部が多いが、校内の活動も含め一切行わなかった。

【学びの継続が第一

〜前向きに工夫を凝らして対処〜

新年度になって始業式から学校を再開した。始業式・新任式は放送で行い、入学式は保護者の出席を制限し、時間を短縮して実施した。新入生試験の行事である対面式、応援歌練習、伝統の運動会は中止とした。行事を中止としたことで、クラスの一体感をつくるのが難しく、生徒の生活面でも例年とは異なる面が垣間見られた。学校では、「3密」をいかに避ける

かが大きな課題である。暫くの期間は短縮授業にして十五分ごとに換気し授業形態なども工夫した。万一の事態に備えオンライン授業にも取り組み、先ずオンデマンド配信型の授業を想定して準備した。部活動も解禁はしたが、活動時間を短縮し、練習試合は泊を伴わない近距離のものに限定した。

県高校総体、インターハイの中止、全国高校総文祭のWeb開催、全国高等学校野球選手権大会も中止となった。三年生にとっては三年間の集大成の大会がなくなり悔しさを隠せなかったが、各都ごとに引退試合などを企画し区切りをつけた。



ある日の授業風景

コロナ禍の終息が見えない中、学校での「新しい生活様式」の定着を図り、学びの継続を第一に、前向きに工夫を凝らして対処していくことが重要である。六月からは部活動もほぼ例年通りの活動に戻った。応援歌練習も密を避け校庭で実施した。スポーツ祭は九月に延期、八月の文化祭は一日のみ非公開で実施した。十月の創立百四十周年記念式典は「3密」に対処、マリオスと学校をリモートで結び、一年生は学校での参加とした。

【現状に萎縮せず
ポジティブに受け止めたい】

受験シーズンに入り入試への影響も心配である。今の三年生から入試制度が大きく変わり、加えてのコロナ対応で生徒の不安は大きい。冷静に対応させていきたい。「新しい生活様式」は、正にウィズコロナの下での「生きる力」の育成であり、併せて、これからは「感染症教育の推進」が極めて重要になってくる。この現状に萎縮することなく、むしろポジティブに受け止め、アフターコロナでの自己実現に向けて貪欲に学び続けてほしいと願っている。

盛岡視覚支援学校の取り組み

【休業中の居場所確保
臨時校長会で情報交換】

盛岡視覚支援学校は視覚に障がいのある幼児、児童、生徒が学ぶ学校で、幼稚部（在籍者0名）、小学部（同7名）、中学部（同7名）、高等部（普通科同6名、専攻科同9名）に合計29名が学んでいる。高等部専攻科には五十歳代の方も学んでいる。現在、13名が寄宿舎で生活している。

新型コロナウイルスの国内感染拡大を受け、安倍首相が2月27日「すべての公立学校に原則3月2日から春季休業に入るまでの間の一斉臨時休業措置を要請するとの考えを公表したことで特別支援学校は大変混乱した。3月2日は学校判断で午前授業とし、休業に向けた指導の時間を確保した。しかし特別支援学校には基礎疾



取材に応える清水校長

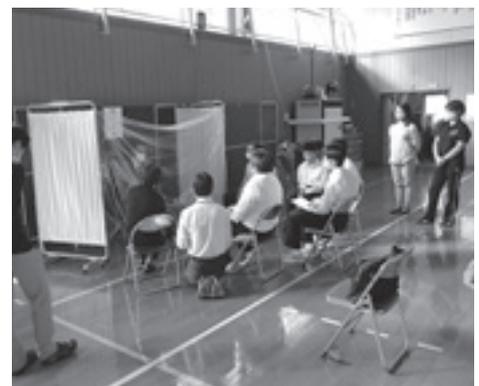
患のある児童生徒が多く、休業中の居場所の確保にも課題があることから、各学校間の情報交換が必要であった。そこで岩手県特別支援学校連絡協議会（国立一校、県立十四校、私立一校）の機能をフルに活用した。三月中に臨時校長会を二度開催し学校独自に判断できるものと足並みを揃えなければならぬものごとを整理した。

休業中の3月13日（金）には卒業生と保護者、在校生代表、教職員のみで卒業式を挙行した。休業中は週末を目的に家庭と連絡を取り児童生徒の様子を確認した。どの家庭も家族を中心に対応していた。修了式、離任式は行わず、職員の異動は新聞発表等で確認してもらうこととした。

【様々な学校行事
教職員の
アイデアを活かして実施】

四月に入り、入学式は来賓参列を省略、始業式・対面式・オリエンテーション等の年度初めの主要な行事もソーシャルディスタンスを取って実施した。五月、六月の校外での活動は延期した。

視覚支援学校における文武の伝統的行事「弁論大会」や「フロアバレーボール大会」は全国大会、



先輩を講師に招いた進路講演も工夫して実施

東北大会とも中止となったが、「3密」に十分配慮の上で校内弁論大会を実施した。高等部の修学旅行は従来の関西方面から青森県へ、同じく中学部は関東方面から秋田県に目的地を変更して実施することにした。文化祭は児童生徒と保護者のみに限定し、バザーも無人販売とするなど工夫して実施することにした。正に「窮すれば通ず」で、職員からのアイデアに助けられている。

政府は「GO TOキャンペーン」実施に踏み切った。これからは、誰が、何時、何処で感染しても不思議ではない。我々は、その覚悟を前提として学校における「新しい生活様式」の確立に努めなければならない。



随想
生き物との関わりを深めるくイモリの飼育
盛岡市立本宮小学校 校長 加藤 良

平成15年ころ、鳥インフルエンザが各地で発生し、人に感染すると危険であるという情報が世界を駆け巡りました。その感染対策として、学校現場で飼育されていた小鳥、チャボ、ニワトリなどの姿が一斉に消えてしまいました。それまで生活科の教科主任で長く低学年の担任であった私は、本当に残念に感じていました。

平成21年、私は盛岡市教育研究会生活科部会で、鳥に代わる生き物との関わりを深める教材として、希望する部会員にイモリ（アカハライモリ）を提供することを始めました。イモリは両生類の仲間です、周りが林や草地で、池や沢のある場所などに生息しています。岩手には多くの生息地があり、春先に必要な数を採集し、それを配りました。それから11年、毎年イモリを提供し続けています。今年も6校から希望があり、90匹ほどお分けしました。イモリの飼育は容易で、エサも市販のもので対応できるため、教材としてはもってこいの

生き物です。また、今の子どもたちはイモリを見たことがほとんどないため、「きもちわるい」という先入観はありません。高学年の女子児童でも、「かわいい」と言ってみるほど、人気があります。

本宮小では、基本的に児童が校長室に来てイモリを見て触り、飼ってみたいかどうか学級に持ち帰って話し合います。その際に、次の条件を出します。①入れ物を用意できること。②飼い方が分かること。③エサを確保できること。④お世話をしっかりすること。条件がクリアできたら、イモリを分けてあげています。6年生のある学級は、何人かがイモリを嫌がっていたので、どうしたら学級全員



イモリと遊ぶ 校長室にて

が嫌がらないようにできるかというところまで、何時間も話し合いをしたそうです。また、4年生のある学級では、2学期になってから飼いたいという意見が出はじめ、担任の先生に許可をもらうために、凶鑑やインターネットなどで飼育方法を調べました。担任の先生は、実は1学期から水槽を用意して、子どもたちの気持ちがいモリに向くことをじっと待っていたのです。学級の壁には、子どもたちが調べてきたイモリの情報が、びっしりと貼ってありました。

私がこのように多くのイモリを採集できることには、深いわけがあります。私が小学生の頃、高校の教員だった父が、ある大学の医学部の先生からイモリを千匹採集し、送ってほしいという無謀な依頼を受けてきました。初めはどこでそんなに調達できるか、模索をしていたようですが、父の知り合いの先生方のおかげで、何箇所か候補地が上がり、家族総出で網やバケツを持って、乗合バスで採

集に出かけました。この依頼は何年か続き、ゴールデンウィークにはイモリを採りに行くということが、我が家の年中行事となりました。さすがに千匹まで数がそろったかどうかは怪しいのですが、毎年数百匹は確実に採集していたはずでした。それだけ採っても、翌年には同じくらいイモリが採れていました。岩手の自然は豊かなのだということが、今になって実感しています。

現在イモリは、岩手県でも準絶滅危惧種に指定されています。そこで、イモリを採集するだけではなく、卵から飼育し、増やせないか挑戦しています。今年で3年目になります。3年目の個体2匹、2年目の個体4匹、今年生まれた1年目の個体10匹が育っています。繁殖が可能な成体になるには、栄養など生育状態も関係すると思いますが、おおむね4年かかることが分かりました。いつまでイモリを提供できるか分かりませんが、子どもたちがイモリを飼育して関わることを通して、生き物の命の尊さやイモリを取り巻く自然の素晴らしさを感じ取ってほしいと願っています。

岩手県教育振興基金 寄附者御芳名 (敬称略)

◆正会員

○小学校・中学校副校長会

- ▼盛岡地区 (十一名) 熊谷浩二、照井宗克、亀谷 琢、今淵哲哉、渡邊康二、佃 拓生、齋藤秀一、奥 智志、吉田 智、鈴木俊文、本堂 隆
- ▼岩手地区 (十四名) 工藤千秋、阿部 薫、佐々木寿子、似内 仁、藤島洋介、玉澤初代、布田 貢

- 小原睦子、高橋伸幸、沼田玲子、佐々木伸一、鎌田 崇、藤原 洋、木村 洋

- ▼紫波地区 (五名) 柳 綾子、佐々木裕美子、最上未来、菊地正徳、正木啓一

- ▼花巻地区 (七名) 山口 充、三浦智子、澤柳健一、佐々木健、紀 瑞子、佐藤幸江、村上花恵

- ▼遠野地区 (七名) 佐藤泰之、河野俊治、石澤綾子、戸羽太一、西田牧恵、小林一志、小田島篤史、

- ▼北上・和賀地区 (二名) 横田 淳、中村 聡
- ▼胆沢地区 (四名) 山戸貴義

スポット その171

盛岡第一高等学校
副校長、青木裕
信先生は日本教
育会岩手県支部
理事の他に、岩
手県高等学校副
校長協議会会
長、全国副校
長会理事等、
多くの役職
に就いており
多忙な毎日
を過ごして
います。



特に今年度はコ
ロナウイルス感
染症対策で様々
な判断と対応を
求められる中、
校内外でリーダ
ーシップを發揮
されてきま

した。また、本校は今年、創立百四十周年を迎えましたが、記念事業についても当初の予定から多くの変更に迫られながらも見事に統括されました。職員室では、普段から職員への声かけと細やかな気配りを欠かしません。面倒なことも労を厭わない態度で「いいよ、俺やるよ」と引き受けてくださり、さらっと片付けてしまいます。

毎日押し寄せる情報を的確に処理しながら、早足でできばきと職員室、校長室、事務室、教室をつなぐ姿はまさに本校の要です。

(副校長 駒込 武志)

岩手県高等学校副校長協議会 会長
理事 青木 裕信氏
(岩手県立盛岡第一高等学校 副校長)

- 八重畑昌司、澤藤雅彦、芳賀かつえ、江刺地区 (一名) 眞壁岳夫

- ▼一関西部地区 (四名) 上館敦彦、佐藤和史、樋岡繁典、佐藤浩之

- ▼気仙地区 (二名) 須藤研一、瀬川貴光
- ▼釜石地区 (七名) 佐々木文美、上山ユミ、竹内 勇、柳原正弥、平野智史、門屋なつみ、青木 啓

- ▼宮古地区 (四名) 中釜敬康、町畑光明、加藤浩和、高橋和志
- ▼下北地区 (三名) 伊藤博光、八木浩司、高橋由佳

- ▼九戸地区 (十二名) 鹿糠 康、谷藤久美子、石関由香、川原直也、上平互哉、安保 学、外館秀幸、谷藤清美、山根一志、竹林瑞彦、星野 昭、八幡一臣

- ▼二戸地区 (六名) 水尻貴之、藤澤周一、高室 敬、鹿糠博子、小野寺広樹、菅原修一

(計八十九名)

○高等学校長協会

- ▼盛岡地区 (二名) 阿部圭次、森山 学

- ▼花巻地区 (一名) 中塚 真

- ▼遠野地区 (一名) 三浦 立

- ▼北上地区 (一名) 鈴木 裕

- ▼胆江地区 (一名) 佐藤由記男

- ▼一関西部地区 (二名) 佐々木直美、嶋 隆

- ▼気仙地区 (二名) 村上 弘、鈴木 博

- ▼釜石地区 (二名) 菊池勝彦

- ▼宮古地区 (一名) 中村智和
- ▼二戸地区 (二名) 金濱千明、上野光久

(計十四名)

○高等学校副校長協議会

- ▼盛岡地区 (八名) 駒込武志、佐藤禎信、寒河江研哉、佐々木直人、安達史枝、外館 悌、小宮山久美子、田村 淳

- ▼岩手地区 (一名) 岩淵 悟
- ▼遠野地区 (一名) 佐藤紀文
- ▼北上地区 (一名) 本正園子
- ▼胆江地区 (三名) 佐藤文字、橋本ゆかり、石川えりか

- ▼一関西部地区 (一名) 金濱 基
- ▼気仙地区 (二名) 吉田 亨、田淵 健
- ▼釜石地区 (二名) 三田正巳、岩淵昌文
- ▼宮古地区 (二名) 菊池由美子、川口史朗

- ▼九戸地区 (三名) 宇方方聡、植木 淳、熊谷和幸
- ▼二戸地区 (一名) 西里孝義

(計二十五名)

今回は、ご寄附をいただいた令和二年度新任の岩手県小中学校副校長会と岩手県高等学校長協会、同高等学校副校長協議会の正会員の先生方をご紹介させていただきます。

ご協力賜りましたことに深く感謝申し上げます。

寄附者御芳名の訂正について
第一八五号に掲載した小学校校長会の御芳名に誤りがありましたので、訂正してお詫び申し上げます。(敬称略)

江刺地区会 正 小野 吉誉
誤 小野寺吉誉

合唱の響き合う学校を目指して

滝沢市立滝沢中央小学校 校長 和田 英



本校は、昨年四月に滝沢市九番目の小学校として誕生しました。児童数が県内一、二位だった滝沢小と鶴飼小の大規模化を解消するために建設された新設校です。開校二年目の現在は、児童数五百八十八名、二十二学級、教職員数四十二名の規模となっています。木材のぬくもりがあふれ、広い廊下や階段などゆとりのある新校舎の中で、子どもたちは伸び伸びと学習に取り組んでいます。

本校では、特色の一つとして「合唱の響き合う学校」を掲げ、全校で合唱活動に取り組んでいます。その活動の中心となっているのが、特設合唱部です。特設合唱部は、四〜六年生の希望者四十二名で創設され、令和元年五月から、本格的な活動をスタートさせました。初年度は、開校記念祝賀会での初ステージ、各種コンクールへの出

場、地域の福祉施設での演奏、クリスマスコンサート開催等の活動を行いました。特筆すべきは、初めて参加したNHK全国音楽コンクール岩手県大会での銅賞獲得でした。放課後や休日の練習で鍛えられた美しい歌声とハーモニーは、全校の手本となり、学年や学級の合唱活動に良い影響を与えてくれます。本校では、秋に音楽会を開催することにしました。この音楽会は、特設合唱部、各学年、全校児童の発表で構成され、日々の音楽活動の成果を地域や保護者の方々に披露し、日頃の感謝の気持ちを伝える機会としています。

令和二年度、特設合唱部は部員が五十名に増え、昨年度より高い目標を設定し、コンクールの課題曲から練習をスタートさせました。しかし、新型コロナウイルスの影響で、出場を予定していたコンクールが、軒並み中止となってしまいました。一時目標を失いかけた子

どもたちでしたが、現在は秋の音楽会に向けて、感染防止対策を取りながら、練習に励んでいます。コンクールはなくとも、音楽活動を継続する意義は計り知れません。リーダーを中心に自主的に練習に取り組みむ姿、協力して自分たちの表現を創り出そうとする姿などを見て、そう感じます。コロナ禍ではありますが、創意工夫を凝らし、感染防止対策を徹底しながら、子どもたちが表現する場を確保していきたいと考えています。



第1回音楽会「心に笑顔と感動を」

山寺の鐘

「啄木の歌碑めぐりマップ」がある。3密を避けながら歌碑巡りをしようと思

い立った。洪民駅前最初の歌碑に出会う。「懐かしき故郷にかへる」。奥州街道を北に向かい2958歩で「愛宕園地・生命の森」だ。黄金色の田んぼの向こうに岩手山が望める。啄木が「生命の森」と名づけて親しんだ場所である。「春まだ浅く」は洪民小学校の校歌でもある。4390歩で啄木の育った「宝徳寺」に。「ふるさとの寺の畔の」の歌を口ずさみながら、啄木記念館に着く。短歌甲子園の時期は全国の高校生で賑わう。7226歩で洪民公園へ。歌碑と岩手山は絶景、絵葉書でよく見る景色だ。「やはらかに柳」は地元保育園の園歌に使われている。鶴飼橋を渡り10236歩で川崎園地、川に沿って夜更け森「公園の木の間」。間もなく好摩駅に着く。16022歩、10.3km、3時間24分。「霧ふかき好摩の原の」。啄木のころは、洪民駅はなくこの駅を利用したとある。先人にちよつぱり触れたような一日であった。コロナの終息を祈りながら。

(祥)